



No.6

展示解説

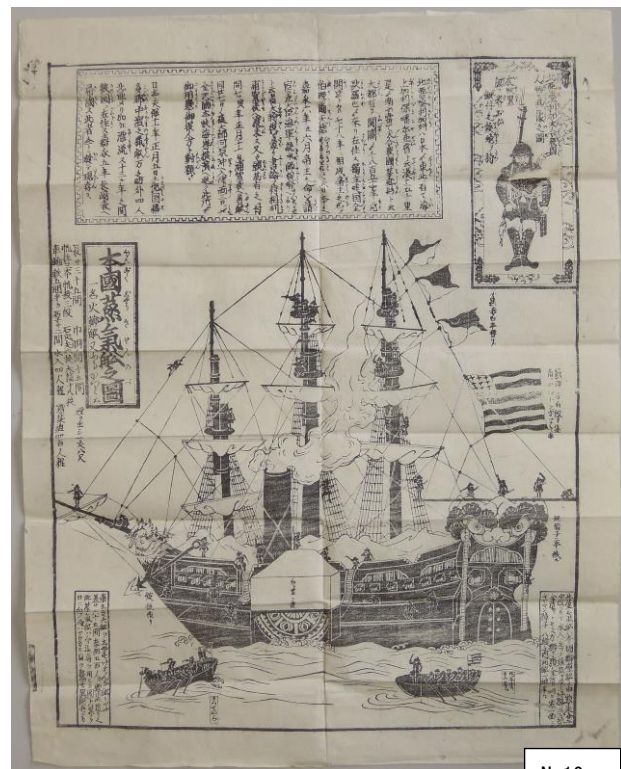
文化財〈古文書〉展示

一挙公開！幕末のかわら版



～ア/事件から
コ/事件まで～

平成 26 (2014) 年
精華町教育委員会

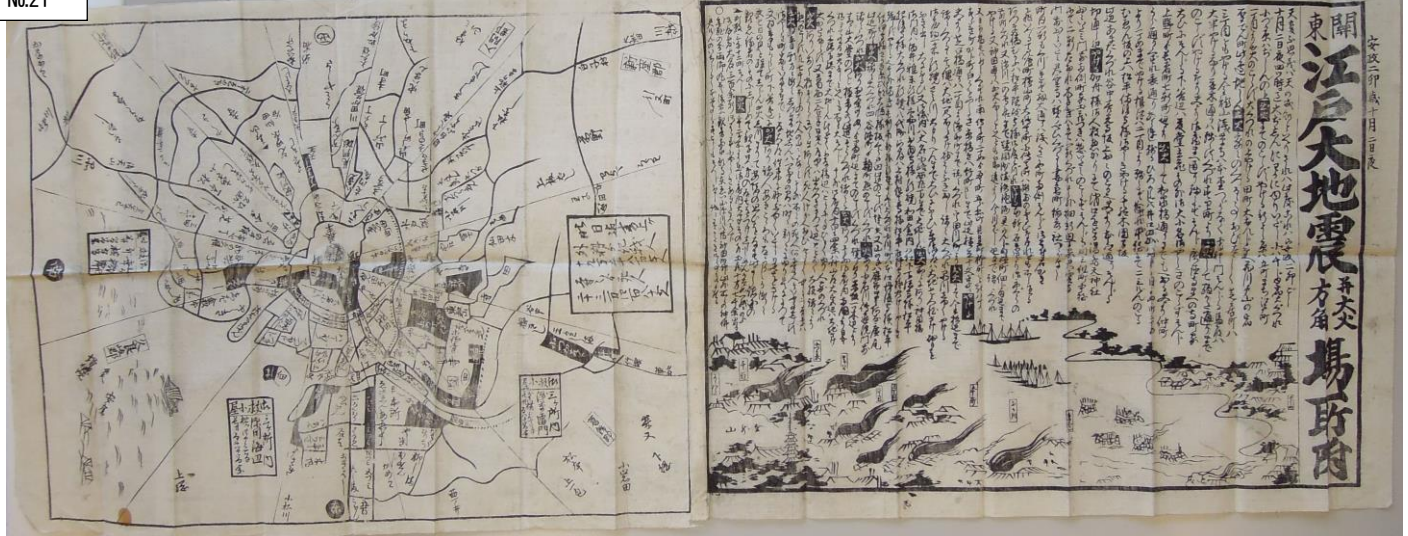


No.10

No.28 (第3紙)



No.21



はじめに

精華町では、昭和 58 年度に町史編纂事業を開始して以来、多くの古文書を調査してきました。特に江戸時代に旗本領の代官を務めた森島清右衛門家に伝わる古文書は 1 万 5339 点の多数に及び、町史編纂事業終了後も教育委員会が調査を継続しています。

今回はその調査成果の公開として、森島家文書の幕末期のかわら版を中心に、関連資料を加えて展示します。幕末には地震・津波・大火などの災害が相次ぎ、ペリーの来航によって外交の大変革を迫られるなど、まさに激動の時代でした。特に災害関係のかわら版は、東日本大震災を経験した今日、過去の災害から防災の教訓を学ぶ資料としても注目されているところであり、参考としていただけたら幸いです。

最後になりましたが、今回の展示にご協力いただきました所蔵者および関係者の皆様方に心より御礼申し上げます。

かわら版（瓦版）とは…

江戸時代、事件・天災・珍談奇聞など庶民の関心事を速報で報じた木版の印刷物。瓦版は今日の新聞の原型と位置づけられるでしょう。

森島家文書には幕末期の瓦版がまとまって残されています。森島家に残された瓦版は、後代のコレクションではなく、発行当時に必要に応じて購入もしくは贈呈によって入手したものが大半とみられます。それは森島家文書に残された書状のなかに、瓦版の入手方法に関する記事が散見されることから分かります。記事と瓦版がセットで保管されてきたことから、情報伝達のツールとして瓦版がどのように活用されていたのか、具体的に分かる貴重な事例です。瓦版自体の記事だけでなく、このような点にも注目していただければ幸いです。

① 江戸の大火

「火事と喧嘩は江戸の華^{けんか}」といわれるほど、江戸（現在の東京）は火災が多い都市でした。江戸から遠く離れた精華町域ですが、江戸の火災は「対岸の火事」ではありませんでした。

それは、江戸に居住する旗本を領主とする村が多かったためです（表を参照）。ひとたび、江戸で領主の屋敷が類焼すれば、屋敷を再建するための高額のお金（御用金）を村側が負担することとなりました。その金額は数百両（現在の数千万円）に及ぶこともあり、江戸の火災は、精華町域の村の財政にも大きな影響を与えかねない災害でした。

また、幕末になると江戸は世界有数の大都市に発展し、日本各地から江戸に出て武家や商家で働く人々も大勢いました。祝園村で旗本天野氏領の代官を勤めた森島清右衛門も、領主の御用のため、しばしば数ヶ月（最大 1 年 11 か月）に及ぶ長期の江戸出張を務めています。

これらの理由から、各地で江戸の火災に関する速報が求められ、地方のニーズにこたえるものとして、被害状況を地図に示した瓦版がたくさん発行されました。ここに展示した火災の瓦版も手紙に同封するなどして、江戸から祝園村に送られてきたものが多くあります。江戸から各地への情報伝達という視点から瓦版をみてみましょう。

幕末期 精華町域の領主

村	領 主	分類
菱田村	禁裏（天皇）	朝廷
	仙洞（上皇）	朝廷
	幕府（代官小堀氏）	幕府
	天野家	旗本
	大徳寺	寺社
下狛村	高木家	旗本
	野々山家（新兵衛）	旗本
	野々山家（大次郎）	旗本
	上田家	旗本
	瑞龍寺	寺社
北稲八間村	笥家	旗本
	朝倉家	旗本
	瑞龍寺	寺社
南稲八妻村	稲葉家（淀藩）	大名
祝園村	天野家	旗本
	大原家	旗本
	大岡家（岩槻藩）	大名
	大岡家（治右衛門）	旗本
	大岡家（鉞次郎）	旗本
	林家	旗本

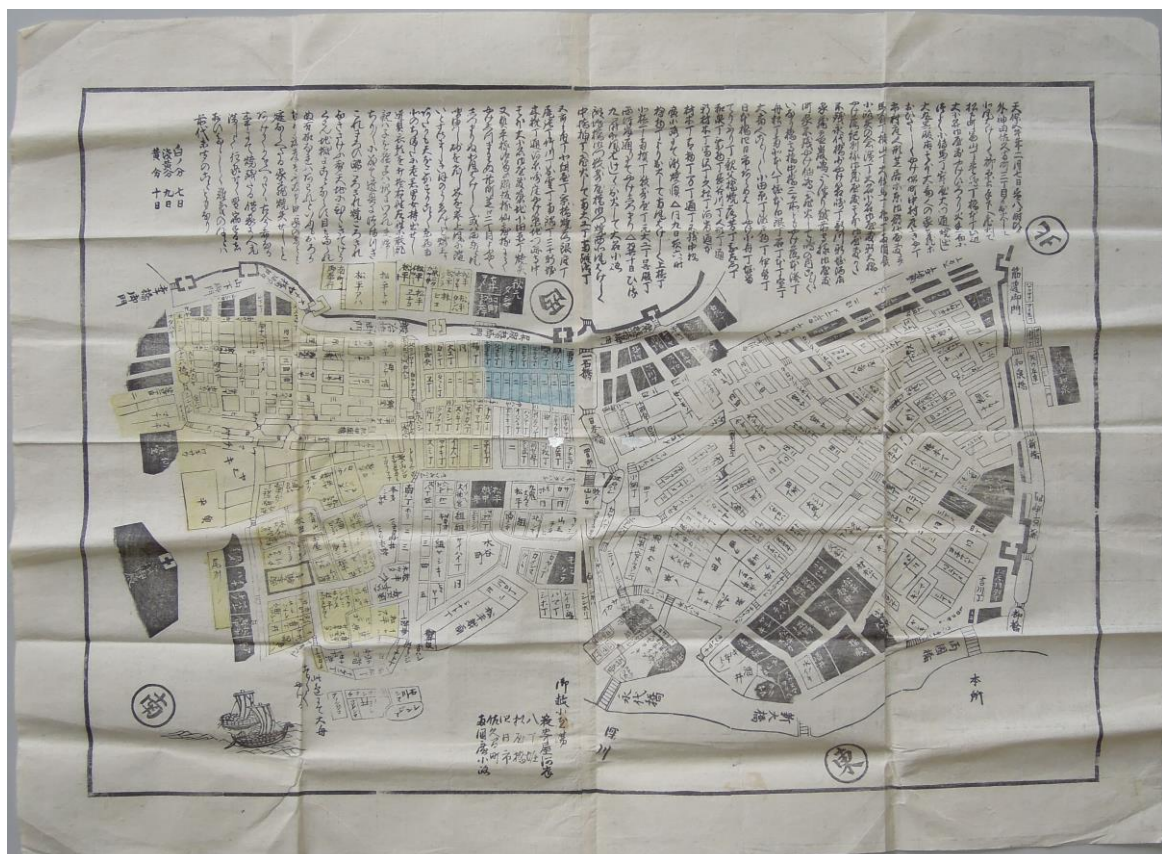
村	領 主	分類
植田村	禁裏（天皇）	朝廷
	大岡家（鉞次郎）	旗本
菅井村	禁裏（天皇）	朝廷
	石井家	公家
	裏松家	公家
	梅溪家	公家
	野々宮家	公家
	勘解由小路家	公家
山田村	禁裏（天皇）	朝廷
	大岡家（鉞次郎）	旗本
乾谷村	禁裏（天皇）	朝廷
	幕府（代官小堀氏）	幕府
	京都守護職（会津藩）	大名
	妙染院	朝廷
	五味家	旗本
	南明院	寺社
柘榴村	禁裏（天皇）	朝廷
	野々山家（新兵衛）	旗本
	橘本坊（石清水八幡宮）	寺社
東畑村	笥家	旗本

※複数の領主が入り組み支配する村が多くありました。
 ※網掛けは、江戸に居住する旗本。
 ※木村礎校訂『旧高旧領取調帳』をもとに作成。

No.1

瓦版 江戸大火図

天保5（1834）年2月7日・9日・10日出火
 森島國男家文書 C2121



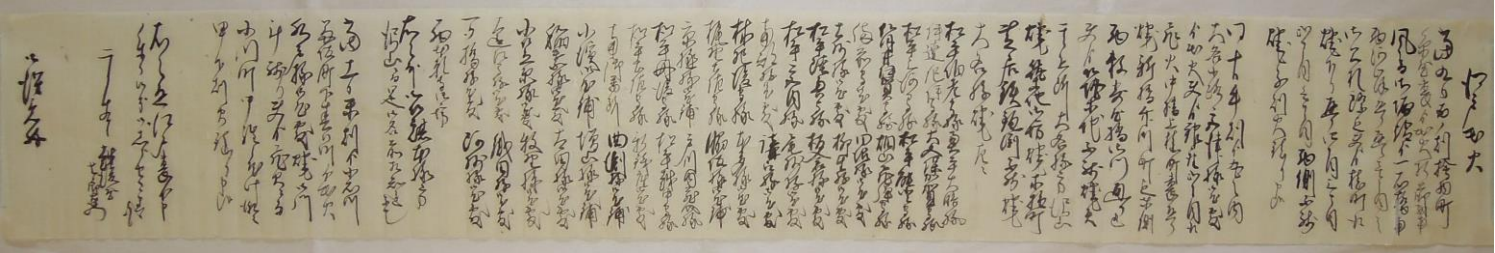
天保 5（1834）年 2 月 7 日に外神田佐久間町（現在の秋葉原駅付近）を火元に、9 日に檜物町（現在の東京駅八重洲口側）を火元に、10 日に大名小路（現在の東京駅丸の内側）を火元に連続して出火し、広範囲を類焼した大火です。

- 白色は 2 月 7 日の火災で類焼した地域
- あさぎ色（水色）は 2 月 9 日の火災で類焼した地域
- 黄色は 2 月 10 日の火災で類焼した地域
- 黒色は 火災をまぬがれた場所

No.2（写真展示）
江戸出火書上

[天保 5（1834）年] 2 月 19 日付
森島國男家文書 C2117

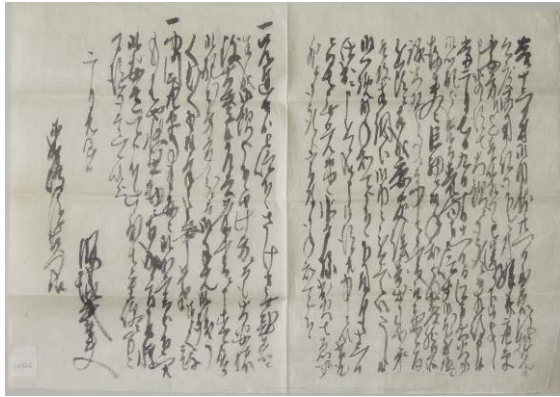
展示No.1 と同じ天保 5 年 2 月の江戸大火のうち、9 日・10 日・11 日に類焼した地域や大名屋敷を書き上げた文書です。
江戸からの火災情報を入手した京都の飛脚問屋「越後屋七郎右衛門」が、「御得意様」（顧客）である祝園村の森島氏に、江戸の速報を伝えたものです。2 月 11 日に発生した江戸の火災から 8 日後のことです。当時、東海道の江戸～京都間は、幕府公用の継飛脚で最速 3 日、通常 5 日程度を要しました。ちなみに一般の徒歩旅行の場合、14 日程度かかりました。



江戸出火	
当九日酉ノ刻、檜物町糸屋裏より出火、折節西南風ニ而、御堀端より一石橋南、西河岸通り、通り壱丁目之御高札際也、夫より横町江焼下り、通り四丁目・三丁目・式丁目・壱丁目西側不残焼る、則火鎮り申候	
同十日午刻より丸之内、大名小路、宮津様御屋敷より出火、夫より銀座式丁目江飛火、中橋、上横町裏通り焼、新橋竹川町之東側、西数寄屋橋御門通り迄、夫より築地不残焼失、其近所大名様方沢山焼、築地御坊焼、木挽町芝居、鉄砲洲、不残焼、大名様焼、左二	
松平伯耆守様	奥平大膳様
伊達紀伊守様	大久保加賀守様
松平三河守様	松平能登守様
筒井伊賀守様	畑山飛騨守様
備前守御屋敷	田沼様御屋敷
土州様御屋敷	柳生様御屋敷
松平陸奥守様	板倉様御屋敷
松平宮内様	尾州様御屋敷
南部様御屋敷	溝口様御屋敷
林肥前守様	本多様御屋敷
梶野土佐守様	脇坂様御屋敷
京極様御屋敷	戸川内蔵介様
松平丹後守様	松平越中守様
松平土佐守様	新銭座御屋敷
南御番所	曲淵様御屋敷
小濱御屋敷	増山様御屋敷
稲葉様御屋敷	太田様御屋敷
小笠原様御屋敷	牧野様御屋敷
遠江守様御屋敷	織田様御屋敷
一ツ橋様屋敷	河州様御屋敷
西本願寺御坊	
右之外之御旗本様方	
沢山二而、是御名前相知れ不申候	
当十一日未刻より小石川富坂町下春日町より出火、水戸様御屋敷焼御門計残り、夫より飛火二而、小川町中程ノやけ、漸々申下刻火鎮り申候	
右之通、江戸裏(表)より申参り候分、御しらせ可申上候、以上	
二月十九日 越後屋	
御得意様 七郎右衛門	

No.3
飯塚武太夫書状

[天保 5（1834）年] 2 月 24 日付
森島國男家文書 C4326



(前略) 当一月七日、九日、十日、十一日与江戸大火事御心配被成候旨、表向江被仰聞、御尤至極ニ存候、夫々巨細ニ御承知被成度、然ル所誠大双之事ニ而、中々書取兼候間、近頃ニ相成、委敷絵図出来候ニ付、壹枚相調ひ、御内々進上之いたし候、御一覽御承知可被下候、下司よりも十三日仕出ニ申進候儀申候得共、中々以書取ニ而者無覚束候、水戸様出火者多外ニ御座候、書付御承知可被下候(中略)

二月廿四日 飯塚武太夫
森嶋清右衛門様

祝園村の領主である旗本天野家の用人(家臣)を務める飯塚武太夫が、祝園村在住の代官森島清右衛門に送った手紙。

文面に〈近頃になり、江戸大火の詳しい絵図が作られたので、買い求めて差し上げます〉と記された絵図こそ、展示No.1 のことだと考えられます。火災発生後遅くとも 13 日後には、江戸で絵図式の瓦版が発行されていたことがうかがわれます。

展示No.1~3 によって、①まず、飛脚を通じて大火の速報が各地に広められ、②次いでビジュアル版ともいうべき絵図式の瓦版が江戸で発行され、③江戸の人々が書状に瓦版を同封して各地の知人に送信するという、情報伝達の段階が分かります。

No.4

瓦版 江戸大火図

嘉永 3 (1850) 年 2 月 5 日出火
森島國男家文書 C2337



嘉永 3 (1850) 年 2 月、^{こうじまち}麴町(現在の四ツ谷駅付近)から出火し、江戸湾岸(現在の田町駅付近)まで類焼した大火です。現在の国会議事堂や霞ヶ関付近も被害にあっています。



No.5-1~2

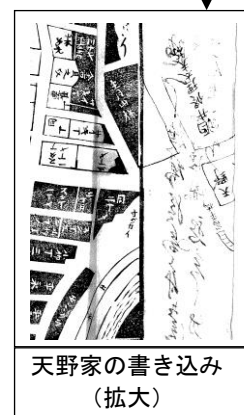
瓦版 江戸大火図

安政元（1854）年 12 月 28 日出火
森島國男家文書 C2314・C2316

2 点とも、安政元（1854）年 12 月、神田連雀町（現在の淡路町駅付近）から出火し、神田・日本橋地区を延焼した火災を描いた瓦版です。この時、祝園村の森島清右衛門は江戸に長期出張中で、2 点とも江戸から国許に送った瓦版です。

展示No.5-1 は火災直後に発行された瓦版と考えられ、2 枚続きで 1 紙目に地図、2 紙目に文章を載せています。しかし、地図は黒一色刷りで分かりにくく、清右衛門も裏面に〈この絵図は不出来にて分かり兼ねますが、祝園の家にある大絵図と引き合わせてください〉と記しています。

一方、展示No.5-2 は類焼を赤色、被害なしを黒色で示した絵図で、清右衛門は裏面に〈随一の焼場絵図なので送ります。親しい方に見せてください〉と書き込んでいます。また、清右衛門は地図の右下枠外に、祝園村の領主である旗本天野家の屋敷（昌平橋南詰）を書き加えています。火元は天野家のすぐ近くでしたが、ギリギリ類焼をまぬがれており、関係者の安堵感が伝わってくるかのようです。



天野家の書き込み
(拡大)

No.6

瓦版 焼場所方角附

安政 5（1858）年 11 月 14 日出火
森島國男家文書 C2283-3

安政 5（1858）年 11 月、下谷練堀小路（現在の秋葉原駅付近）から出火し、京橋付近（現在の東京駅南東側）まで延焼した火災です。天保 5（1834）年（展示No.1）、安政元（1854）年（展示No.5）と同様に、町人の住居が密集していた下町の日本橋地区が焼失しています。冬場に西北の風の影響で北から南に向かって延焼した火災が多かったことが分かります。【写真は表紙参照】

No.7 (写真展示)

森井掟吉書状

[安政 5 (1858) 年] 11 月 29 日付
森島國男家文書 A1164-4

森井掟吉は、神童子村（現在の木津川市山城町）出身で森島清右衛門の親類にあたり、江戸に出て旗本天野家の家臣となっていた人物です。

これは、掟吉が山城に帰省した後、再び江戸に無事戻ったことを、祝園村の森島清右衛門に知らせた書状です。文中に「江戸表大火」の「焼場所附一枚」を送るとありますが、展示No.6 がその地図に該当すると考えられます。



(部分)	
（前略）且亦、江戸表大火之趣、三州岡崎ニ而承知仕、大心配仕候得共、御屋敷、大原様も御別条無御座、大悦仕候、右焼場所附一枚差上候間、御披見御承知可被下候、尚追々嚴寒ニ相成、随分御厭専一二奉禱上候、餘ハ後便ト申残候、頓首	十一月廿九日 森井掟吉
森島清右衛門様	